

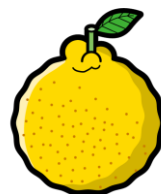
アトリエ 琉游舎 だより 41号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

2018年12月5日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

一陽来復 冬至



- 日一日と太陽の力が弱まってきています。今年の冬至は12月22日。カボチャを食べて栄養を蓄え、ゆず湯に入って体を温め、寒さが一層厳しくなるこれからの備えましょう。
- 中国の陰陽の考えでは、太陽が出ている時間が一年で一番短い冬至を「陰」が一番強い日と考えられています。翌日からは再び「陽」に還るので冬至の日を「一陽来復」とも言い表してきました。
- 転じて冬が去り春が来ることや、悪いことが続いたあとにやっとよい方向へ向かうという意味にもなりました。
- とても気が早いことですが、冬至の日が来たらもうあとは春に向かっていくだけです。
- 本格的な寒さはこれからだと思いますが、「冬来たりなば春遠からじ」「一陽来復」と思えば、なぜか心が浮き立つ気分にはなりませんか？
- この季節は慌ただしく、行事もいろいろ重なるときですが、そんなときこそ琉游舎で一休み。おしゃべりをしながらゆっくりとした時間をお過ごし下さい。

★今年も近くて一番早い初詣 琉游舎の新年祝祷会です
除夜の鐘とともに（1月1日0時から）新年祝祷会の法要を行います

詩話会

12月8日(土)
13時半から

読書会

12月11・25日(火)
13時半から

映画会

毎週木曜日
13時半から

12月27日(木)1月3日(木)の映画会はお休みです
1月6日(日)は書き初め写経会
1月1日(火)の写経会はお休みします

12/6	13時半	嵐が丘 (104分・字幕)	エミリー・ブロンテ原作。兄妹のように育ったキャシーとヒースクリフ。2人は成長してもひかれ合うが、上流階級の生活にあこがれるキャシーは、、、ラブロマンス不朽の名作。
12/13	13時半	巴里の屋根の下 (90分・字幕)	ルネ・クレール監督。街角で出会ったアルペールとポーラ。ポーラはアパートの鍵をなくして彼のアパートに泊めてもらうが泥棒と間違えられ刑務所送りに、、、
12/20	13時半	キリマンジャロの雪 (117分・字幕)	グレゴリー・ベック主演。原作はヘミングウェイ。死を前にした小説家が愛とロマンに満ちた半生を回顧する。小説の世界観を独自の手法で映画化。
12月27日・1月3日の映画会はお休みします			
1/10	13時半	恐るべき子供たち (106分・字幕)	ジャン・ピエールメルビル監督、ジャン・コクトー原作。兄弟2人だけの閉ざされた世界から、大人にならざる得なくなったときに起こった悲劇。思春期の心の脆さを描く。

最近辞書を引いても読めない字が多くて困ってしまいます。正確にはどう読んでよいのか分からない字が多いということです。漢字は表意文字ですから文字自体に意味があります。音読みは中国語の発音（主に漢音や呉音）をそのまま音にしたもの。訓読みは漢字に翻訳としてつけられた日本語です。と言うような言わずもがなの漢字の基礎は今やガラガラと崩れ落ちているようです。ある名簿を見ていたら、瞬間的に意味や音を捉まえられない漢字の羅列で、目がクラクラとして漢字酔いになりそうでした。いわゆる当て字というものなのでしょうが、なんと発音してよいかふりがなが付いていないと読めません。たとえ付いていたとしても何でこの発音になるのかが分かりません。言葉は時と共に変遷していくものですから、意味や読み方が変わったり、新しい意味が加わることは当たり前で、それは言葉にとって健全なことです。このいわゆる「キラキラネーム」や「DQN（ドクン）ネーム」と言われるものが、果たしてこの健全な変遷の流れにあるものなのか、日本語と日本人の将来を写す水晶玉のような気がしてなりません。余談ですが、昭和の時代に塀などで散見したやけに意気った漢字の羅列を思い出してしまいました。私は日本と日本語を愛死天流ので、どうか鬼魔愚零で日本語を仏恥義理したりしないで下さい。夜露死苦！

かつての文学によく見かける「五月雨（さみだれ）」「氷菓子（アイスクリーム）」「嗚呼（ああ）」「亜米利加（アメリカ）」も「英吉利（イギリス）」も全部当て字です。お経の中にも沢山当て字が出てきます。「般若（はんにゃ）」「涅槃（ねはん）」は、お経の原語であるパーリー語ではそれぞれ「パンニャー」「ニッバーナ」と発音され、音そのままを漢字の音に当てたものです。お経を訳すときに同じ意味の中国語がある場合にはその中国語に置き換えて訳しましたが、ぴったり一致する中国語がない場合や既存の中国語に置き換えてしまうとニュアンスが伝わらない場合は、パーリー語をそのまま音写したのです。「般若」は「悟りを得る智慧・真理を把握する智慧」、「涅槃」は「煩惱を滅した悟りの境地・死ぬこと」などと辞書で解説されています。さあこの解説で「般若」や「涅槃」が理解できたでしょうか。私には「悟り?」「真理?」「煩惱?」「それはどういうこと?」という新たな疑問がわいてくるばかりです。言葉の解説が解説する言葉の周りをぐるぐると回っているだけにしか見えないのです。言葉はその言葉を受け入れ、言葉の指し示すままに実践して初めて意味が体得できるのだと私は考えます。狂言綺語で私が毎回書いていることはいつも同じたったひとつのことです。それは「ありのままに観る（般若）という行いの実践が安らぎの処（涅槃）にたどり着くことそのものだ」と信じていることです。「般若」も「涅槃」も「行い」の中で初めてその言葉の意味が次第に形を表し、体に実感できるようになるのです。

法華経の中に「言語道断」^{注1}と言う言葉があります。これは私達もよく使う「言語道断」のこと。通常は「そのふるまいは言語道断だ!」など言葉では言い表せないとんでもないひどいことの意味に使われますが、本来の意味は「言葉では表現できない仏さまの真理」をさす言葉です。「言語道断」は長い年月に渡る僧侶たちの、仏の真理（言語道断）の代弁の中で意味が真反対になってしまいました。このように「仏の真理」が「ひどいこと」に変わってしまった理由はなんでしょう。最近ニュースを見ていると「沖縄の心に寄り添う」というフレーズをよく耳にします。何人かの立場ある方がその言葉を喋っているようですが、いつの間にかその言葉は「沖縄の心を踏みにじる」と私には聞こえてきてしまうのです。「寄り添う」という単語の意味が「踏みにじる」という意味になって私に受容されてしまったということです。全く正反対の意味に聞こえてしまう理由は明らかでしょう。その人の話す「寄り添う」には寄り添うという実践も実体もなく、真反対の振る舞いをしているその矛盾を取り繕う言葉にしか聞こえないからです。意味を伝えるための言葉を、意味をごまかすために使っているのです。日本人は古代より言霊信仰がありました。言葉に宿る霊力が、言語表現の内容を現実を実現することがあるという言葉への信仰です。「寄り添う」を乱発されている方々は言霊信仰の持ち主なのでしょう。乱発しすぎで神仏の怒りを呼び起こさないことを祈るばかりです。

「言語道断」の意味の変容も「寄り添う」と同じように言霊信仰を信じて、聞く人に「言語道断」を乱発してきた人たちの仕業なのです。仏の真理（言語道断）を説法する僧侶たちの現実での振る舞いに、言語道断（ひどいこと）の所行を見たり、説法を信じてとんでもないひどい目に遭った人々の総体が「仏の真理」を「ひどいこと」に変化させてしまったのです。日本に入ってきてからこのように全く違う意味に変容して使われている仏教由来の言葉が沢山あります。「諦める」「無学」「分別・無分別」「道楽」「因縁」「縁起」「我慢」など枚挙にいとまがありません。その意味の変遷は「行い」を怠った人々の置き土産であり、日本人の仏教受容の歴史の一断面なのでしょう。仏教は「はじめに行いありき」です。「行い」によって言葉は私達の身となり実となります。そしてその行いの道そのものは「言語道断」であり、つまりは「言葉で語る道が断たれている」ところまで日々実践し続けることなのです。

私の実践の場である「琉游舎」はその言葉の意味するとおりに、私の身
 となり実となっているのでしょうか？今回は言葉で表現する
 もどかしさを感じながら筆を置きたいと思います。
 それではまた次号でお会いしましょう（出琉）

琉游舎：戸井 出琉・恭子

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850

Mail:toi101izuru@outlook.jp

注1：妙法蓮華経安楽行品第14